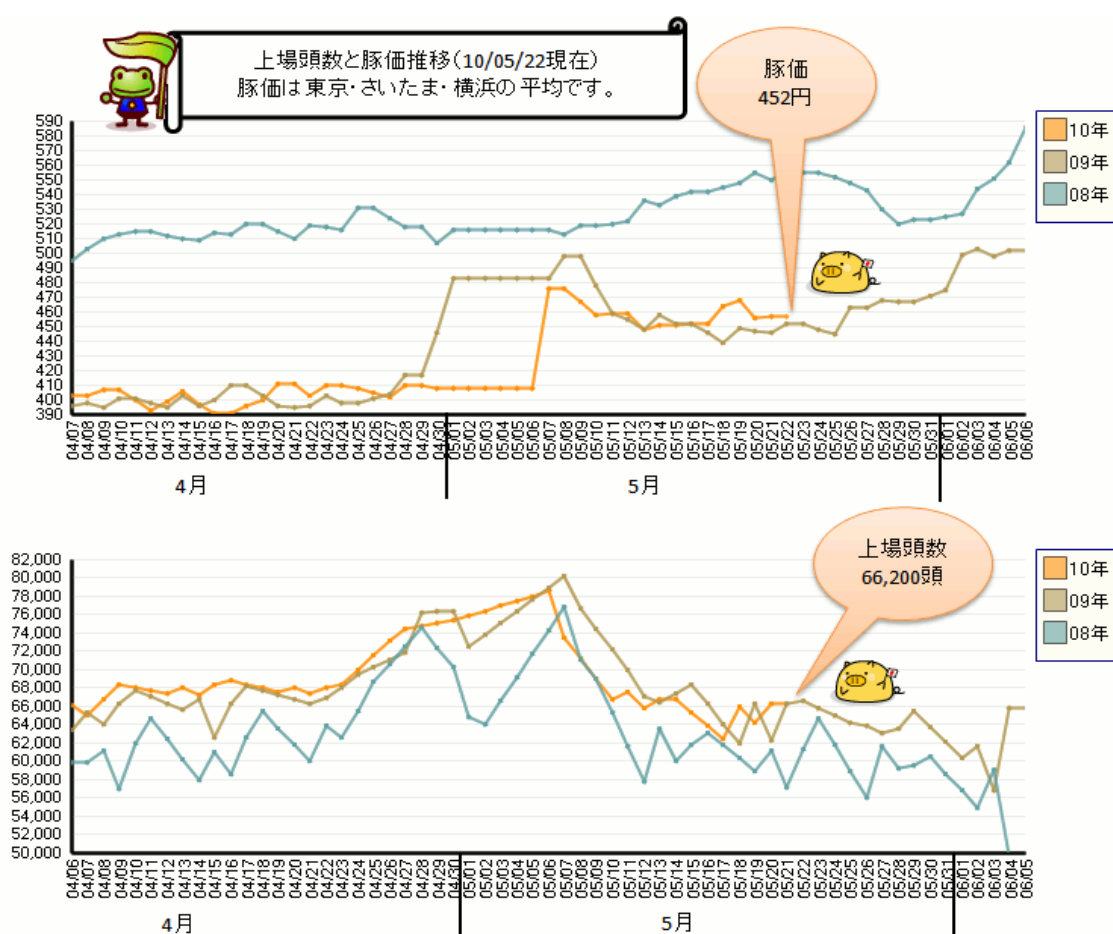


餌の使い方に注意！ 昨今見られる生産上の注意

サーコワクチンの効果が大きいため、全国的に発育がスピーディで出荷が早くなったようです。また気候も影響しているのではないのでしょうか。従来ですと5月も下旬になれば、かなり蒸し暑い日もあるはずですが、一時的に暑くなってもすぐに冷風が吹くなど暑さからの食欲不振は今年に限ってはあまり縁がないかもしれません。

ワクチンだけのせいではないと思いますが、実際に12~1月生まれの肉豚の出荷が約1カ月早くなったせいで5月に入って出荷数がかなり前倒し的に減少してきました。こうしたこともあり豚価が上昇したのかもしれない。もう少し上がって欲しいものの、今の豚価で、なすべきことはできるだけ豚を落とすことなく、丁寧に育て上げ、過去長く続いた低豚価を挽回することです。



2009年度(3月～2月)のGPF関連農場92社の上位10%目の生産成績の推移

おもな生産項目	2009年度	2008年度	差
期末母豚数	557	569	-8
分娩率(%)	89.7	89.3	+0.4
再発率(%)	5.1	5.5	+0.4
母豚回転数	2.43	2.44	-0.01
非生産日数	51.4	54.0	+2.6
平均生存産子数	11.64	11.57	+0.07
平均死産数	0.68	0.66	-0.02
平均離乳頭数	10.56	10.36	+0.2
母豚あたり年間生存産子	27.79	27.86	-0.07
母豚あたり年間離乳頭数	25.17	25.08	+0.09
母豚あたり年間出荷数	24.15	24.02	+0.13
生時体重(kg)	1.6	1.6	-
21日令重(頭)	7.5	7.3	+0.2
21日令重(腹)	75.6	71.3	+4.3
SPI	123.4	118.7	+4.7
死亡率(哺乳)	6.6	7.5	+0.9
死亡率(離乳後)	2.5	3.2	+0.7
死亡率(不明豚含め出荷まで)	10.0	11.9	+1.9
一日増体重	778.3	770.9	+7.4
一日飼料摂取量(肉豚)	2403.7	2360.0	+43.7
要求率(肉豚)	2.63	2.66	+0.03
要求率(農場)	3.11	3.13	+0.02
出荷日数	166.1	168.9	+2.8
出荷体重	121.2	120.2	+1.0

(良い指標には+表示で青く、悪い指標には-表示で赤く示した)

特に顕著になっているのが、子豚の肥育成績です。軒並み改善が報告されており、特に力を入れている分娩舎の母豚管理の成果で、SPI(母豚の繁殖インデックス)、21日令補正腹体重ともに大きく改善されました。分娩舎での下痢がなくなったことも大きな要素でしょう。

グループ全体を見ても多くの農場に改善が見られますが、厳しい経営環境だけは確かです。特に出荷頭数(売上)を増やすこと、最大のコストである飼料費を抑え、出荷を早めることが重要です。今期販売に供される豚は、すでに種付け終了以降の豚ですから、なおさら効率良い生産が求められます。

今年は温度の日較差が激しいです。カーテンの開け閉めにはことさら神経を使っているのではないでしょう。一度風に当たってしまうと常在の疾病群(肺炎関連・腸炎)が動き出す恐れがありますので、注意してく

ださい。

また経営環境が厳しくなると、どうしても肥育の仕上げ飼料の割合を増やすなど、当然飼料のコストダウンを追求する動きが出てきます。狙いは良いのですが、豚の大きさに合わせた飼料設計の考え方にある程度沿った与え方が必要になってきますので、ご注意ください。



給餌器に突っ込んで斜めになって競って食べる肉豚(フィーダーが小さいか)

例えば一般には50～60kgくらいの肉豚こそがリジンをもっと必要としますので、この時期は子豚飼料を継続して使って欲しいと思います。早くから肥育仕上げ飼料に換えてしまうと、赤肉量の少ない細めの豚になってしまうことがあります。うまくいっている時は大きな差は出ませんが、「和豚もちぶた」の特徴である脂の乗りが欠けたものになってしまうことがありますので注意が必要です。特に発育の素晴らしい農場こそ、必要な時にしっかりとリジンが摂取できるように心がけたいものです。

これと似たケースですが、離乳舎でも早めに「スターター」から「子豚」へ移行してしまっている農場があります。「スターター」は少なくとも体重18～20kgくらいまで与えたい飼料です。あまり早く「子豚」に替わってしまうと、豚にとって早すぎで、軟便、下痢などの原因になることがあるので注意しましょう。「スターター」と「子豚」の餌の違いはリジン対カロリー比が異なることと、餌の粒子が違います。スクリーンメッシュで2～3m/mメッシュの違いがありますが、子豚にとっては「子豚」飼料は食べ易いので、食べ過ぎてしまう可能性があります。コスト的には多少高くなりますが「スターター」飼料を25kgくらいまで給与した方が良いと思います。(これらの飼料の使い方などの話は、弊社で指定している飼料についてのことであり、一般農場では飼料設計されている方やメーカーに説明をしていただきながら、より理想に合った使用を模索して欲しいと思います。

昨年は棚卸評価額が期首と期末で大きく下がったため、多くの農場が実質利益を出せずに厳しい経営成績となりましたが、実質的には原料である飼料価格に依存する部分があるので、それほど心配することはありません。こうしたよい豚価の恩恵をできるだけ長く受けられるように願いたいものです。

2010年6月 グローバルピッグファーム(株)